



風 *fuu*

URE

ピュア

C o n t e n t s

P U R E 5

特別番外編
ただ、彼女に向かって…… 351

P U R E

1 天敵との遭遇

「くやしい。くやしい。くやしーいっ」

ヒステリックに喚く藤堂蘭子を前にして、早瀬川愛美は、できることなら他人のふりがしたかった。

遊園地内のファーストフードの店内に女三人座っているが、日曜日ということもあって店の中は空いた椅子がないほど混み合っている。周囲が騒々しいとはいえ、蘭子のヒステリックな叫びは、周りの注目を否応なしに集めているに違いないわけで……

「たいした男を連れてたわけでもないくせに。あのクソ女！」

友の罵声の恥ずかしさに、愛美は唇を噛み締め、頬を真つ赤に染めた。

愛美の隣に座っている、一風変わった性格の桂崎百代は、愉快そうににやにやしているばかりだ。愛美は視線を巡らし、親友のはしたない言葉に対する周囲の反応を窺つた。

すぐ近くにいるアベックが、こちらをちらちら見ながら笑い合っていた。アベックの女性のほうと目を合わせそうになつた彼女は慌てて視線を戻し、意味もなく黒縁眼鏡の位置を直した。
「蘭ちゃん、周りに人がいることを忘れないでほしいんだけどお」

愛美は顔を赤らめつつ、頭から湯気を立てんばかりにカツカとしている蘭子を、彼女にできうる限り咎める口調でたしなめた。

「ほんと、見苦しいよ」

あっけらかんとした顔で声を潜めもせずに百代が言つた。当然、蘭子の顔は怒りに歪んだ。

「なんですつてえ〜」

名前のように、あでやかで華のある綺麗な顔は台無しだ。

自分の美しさを鼻にかけるきらいがある蘭子の鼻先に、鏡をつきつけてやりたいものだと、愛美はため息をつきながら思った。

「とにかく、あんなやつらに負けてなるものですか。こうなつたら、もうなにがなんでも彼氏を作れるわよっ！」

怒りに震える声で蘭子が宣言するように吼え、愛美と百代は思わず目を見交わし合つた。

強情さにかけては誰にも引けを取らない蘭子だ。こうと決めたらとことんやるだろう。

しかし、この傲慢で自己中の塊である蘭子と付き合おうという殊勝な男性など、果たしているものだろうか？

「まあ、頑張つてみたら……どうかな」

愛美は気軽に励ました。どうせ、ひとつひととど。

「もちろん、あんたたちも彼氏を作るのよ」

「はひ」

とんでもない蘭子の発言に、驚きが過ぎた愛美の口からは、しゃつくりのような音が飛び出た。
愛美は蘭子をまじまじと見つめた。

「あの三馬鹿トリオですら男がいるんだもの、わたくしたちが本気になれば、至極簡単なことよ」
傲然と言い放った蘭子は腕組みをし、見下すように目を細めて愛美と百代を睨んできた。

「わたし一人じや、トリプルデートなんてできなことがわからないの」

愛美は顔を引きつらせた。蘭子はどこからか男の人を適当に見繕つてきて、強制的に彼女たちに押しつけるつもりじやないだろうか……

こんなことになつたのも、蘭子を敵視している奥谷静穂おくや せいほを頭とする仲間三人のせいだ。三人はこうあるごとに彼女たちに絡んでくるのだ。

蘭子はその性格が祟つて敵を作りやすい。なかでも静穂は、蘭子に対して憎悪に燃えていると言つてもいいぐらいだった。

静穂は家柄もよく容貌も秀でているのだが、どうしたつて蘭子に負けている。愛美にすれば、そんなことはどうでもいいことだろうと思うのだが、静穂のプライドはそれを許さないらしかつた。そしてつい先程、この遊園地内で静穂一派が彼氏を連れているのにばつたり出くわしたのだ。もちろん、それが偶然とは誰ひとり信じていらない。

「遊園地に女だけで遊びにくるなんてかわいそうに、もてない女にはなりたくないわ、わたくし」
優越を声にも顔にもおおっぴらに滲ませて、すれ違いざま、静穂は聞こえよがしにのたまつた。
そんな侮辱に、この蘭子がおとなしく黙つているわけがなく……

愛美は蘭子に反論しようとして口を開きかけたが、そのまま閉じた。

いままでの経験からいって、頭に血が上った状態の蘭子を諭すなんて無駄なことだ。どんな論争も平行線を辿るだけ……

ここは蘭子を落ち着かせるために、話を合わせておくのが一番いいと愛美は結論を出し、百代に向けてこつそり目配せした。何を考えているのかわからない百代だが、頭の回転は速いのだ。

「ま、そだね」

愛美の考えをうまく察知してくれたのか、百代は間を置かず頷いた。彼女はこの事態が面白いらしく、楽しげに目玉をくるくるさせている。

自分の意見が親友ふたりから支持されたことで、蘭子の機嫌は途端に良くなつた。

「そうと決まれば、まずはリストを作らなきやね」

リスト？

眉を寄せた愛美と百代のほうへ、蘭子はぐつと身を乗り出してきた。

翌日の午後、三人は学校から車で十五分のところにある百代の家にいた。

百代は思考も発言も変わっている子で、彼女の趣味も同じようにとても風変わりだ。当然というか、この部屋にも普通のものがない。

グロテスクといえるようなぬいぐるみを、可愛いと叫びながら抱き締める彼女の私服もその類を出ないし、当然というか、棚に並ぶDVDや本も、おどろおどろしいものばかりが並んでいる。そ

の背表紙にすら愛美が視線を向けられないようなものが……ずらりと。

百代や蘭子と愛美が友達になつたのは、ここ半年のことだ。愛美の父の徳治^{とくじ}が、蘭子たちの通う名門私立高校の、大学部の陶芸の教授として雇つてもらえることになり、それに応じて三年になると同時に、愛美は編入してきたのだ。

芸術家肌というのか、愛美の父は笑い顔などたまにしか見たことがないほど無愛想な人間だ。それに自分の思いを偽つて、ひとの機嫌を取るなんて逆立ちしたつてできるひとではない。もしかすると、それが祟つて以前勤めていた大学は首になつたのかもしれない。

ここへ来るまで、陶芸の窯のある山の中の家で、父の陶芸品を糧にして、親子ふたり暮らしていたが、いまは学校の近くにあるいくぶん老朽化したアパートに移り住んでいる。

ここで生活が嫌いということはないが、山の中の暮らしは愛美にとってお気に入りの世界だ。たつぶりの自然と木と語らえる静寂。そして窯から立ち上る煙と、独特の匂い。

工房には、父が他者を入れることを嫌つてあまり入らせてもらえないのだが、工房の外で、もらつた土をこねては、実用に使う皿や鉢などを愛美は創らせてもらっている。自分で土をこねてできあがつた皿を手にしたときのジーンとする静かな感動は、父を理解できたと思える特別な瞬間だ。

「候補者は出揃つたわ」

蘭子はすでに勝ちを収めたかのように、自分の書きあげたリストを高々と掲げて叫んだ。

切り取つたレポート用紙を前にシャーペンを握り、愛美は眞面目に考え込んでいるふりをしてい

た。真向かいに座っている蘭子は、テストのときは比べ物にならないくらい真剣な顔で見直しをし始めた。

愛美の右隣にいる百代の紙を見ると、これが驚いたことに、びつしりと書き込まれている。立ち上がりつた蘭子が、愛美と百代、双方の紙を点検するように上から見下ろしてきたのに気づき、愛美は慌てて真っ白な紙を隠そうとしたが、間に合わなかつた。

「愛美つたらやる気あるの。白紙のまんまじやないの。誰でもいいから早く書きなさい！」ガミガミと囁みつくように怒鳴られ、むつとした愛美が言い返す前に、蘭子は標的を百代に変えた。

「百代。あんたつてば、学校中の男子生徒の名前全部書いてんじやないの？ 真剣にやりなさい、真剣に！」

真剣なのはやはり蘭子だけのようだと、愛美は胸を撫で下ろした。

「だつてさ」

百代は面白くなさそうに呟いた。

「言い訳はいいわ」

ぴしゃりと言つた蘭子は百代をねめつけた。

「とにかく、百代の彼氏候補から選ぶわよ。この中から、まず三人ぐらいにまで絞らなきゃね」そう言つて考え込んだ蘭子は、ぽんと手を打ち、指で紙面をさした。

「百代、この中から、いますぐでも、キスしてもいいと思う男だけ残しなさい！」

「は……キス？」

百代はぽかんとして繰り返し、きゅっと眉を寄せた。

「誰ともいやよ」

「なら、手を握られてもいいかなと思う人でもいいわ」

そう言われた百代は、紙をじつと見つめ、ほとんどの名前を二重線であつさり消した。

それでも数人の名が残つたようだつた。一人は同じクラスの石井慶介。^{いしいけいすけ}もう一人は彼女のいとこだと言う。

「あんたの幼馴染の石井ねえ。……あいつじや……ねえ」

愛美は石井の顔を思い浮かべた。人の良さそうな垂れ目の男子だ。

「……冴えないんじやないかしら。三馬鹿との対決には……こう、もつと、ねえ」

蘭子は顔を斜に向けて、満ち足りなさのこもつたため息をついた。その表情から、石井が百代の恋人候補から消されたのがわかつた。

「まあいいわ。それじゃあ、お次は……愛美ね」

蘭子はそう口にしつつ、愛美的手にしている白紙の紙を鋭く見つめてきた。

「わたしは……その」

もごもご言いつつ、愛美は蘭子の目に触れないよう、紙をテーブルの下に隠した。

「ど、とにかく、蘭ちゃんの後でいいわ。まだひとりも書いてないし……」

ありがたいことに、蘭子は目を細めつつも、愛美的提案に素直に従つてくれた。

蘭子の候補者の名を上から順に辿つていい途中で、愛美は頭が痛くなつた。一緒に見ていた百代は、ヒクヒクと口元を歪めている。ほとんどが年上で、高校生などひとりもいない。それどころか有名タレントの名や、超人気アイドルにすいぶん年上の俳優の名前まで書き込んであつた。確かにこの中のひとりをゲットできたら、間違いなく静穂の鼻は明かしてやれるだろうが……愛美はリストの一番最後に書かれた名前が、すでに線で消されているのに気づいた。

「これは誰なの？」

ちよつとした興味を引かれて、愛美は蘭子に尋ねてみた。

ご機嫌な笑顔で、ランクづけのために番号や丸や二重丸の記号を名前の前に書き込んでいた蘭子だつたが、愛美の問いに焦りを浮かべ、消された名前をさらに真っ黒に塗りつぶしてしまつた。

「問題外！ 見栄えはなかなかなんだけど。性格のほうが……ね」

「性格？ いつたい誰なの？」

「どんでもなく尊大で、高飛車なのよ。呆れかえるぐらい傲慢で謙虚のけの字も知らないやつよ」

蘭子の説明に、愛美は笑いを堪えた。その説明に、蘭子その人を思い浮かべずにいられようか

……
「ふつ、ふははは……」

愛美と同じ思考を辿つたのか、派手に吹き出した百代は、お腹に手を当て、海老のように背中を折つて苦しげに笑いこけた。

「何がおかしいのよ。変な娘ね」

笑いの理由にまつたく思い至れないらしく、蘭子は怪訝な顔で百代を睨んだ。そのせいで、さら
に百代の笑いは増長されたわけで、愛美は自分の笑いを散らす為に腿をぎゅっと抓つた。

愛美と百代は、最終的に蘭子のお眼鏡に叶つた男子を候補者として無理やりあてがわれた。
文句を言いたいのは山々だが、言つたところで蘭子は歯牙にもかけないだろう。

「それじや、おやつにしましよう」

蘭子は思いどおりにことが進んだことにご満悦なようで、銀色の入れ物からプリンを取り出し
て、三人それぞれの前に置いた。プリンのカツップを目にして愛美は、無意識に笑みを浮かべていた。

実はこのプリン、ただのプリンではなく、華の樹堂の超贅沢プリンなのだ。

蘭子は小さなクーラーボックスに入れて、このプリンを持つてきた。なぜ彼女が今日という日に、
このプリンを持参してきたかという理由はわかつてゐる。このプリンが、愛美的理性をちょつぴり
狂わせることを知つてゐるからだ。愛美的鼻先にこのプリンをぶら下げれば、どんなことも承諾さ
せられると、たかを括つてゐる。だが哀しいことに、その考えは外れていないわけで……

愛美はため息をつきながら、プリンをすくつてゆつくりと口に運んだ。

口中に、広がるしあわせ……

「愛美つてば」

百代の笑い声が聞こえ、愛美は閉じていた目を開けて、気まずく目の前のふたりを見つめた。

蘭子は得々とした笑みを浮かべてゐる。その瘤に障る笑みに反発したくなつたものの、もうひと
つプリンを差し出され、愛美は条件反射で笑みを浮かべた。

2 とんでもない電話

熱しやすく冷めやすい蘭子のこと、彼氏獲得作戦熱も自然と冷めるだらうと思っていたのだが、残念なことに、蘭子の熱は冷めるどころか加熱してゆくばかりだつた。

それもこれも今回の騒ぎを引き起こした張本人の静穂たちが、ことあるごとに蘭子にちよつかいをかけてくるからなのだ。

彼氏がいないことをあざけつたり、不憫そうな目で同情を込めた慰めの言葉をわざとらしく耳に入れたり……。そして静穂は、憤怒で真つ赤になつた蘭子を見て満足そうに去つてゆく。

おまけに厄介事がもうひとつ。蘭子の天敵である櫻井比呂(さくらいひろ)や也が、取材と銘打つて、蘭子の神経を逆なでしてくるのだ。櫻井の書く記事は狙いが確かで面白く、とても人気があるのだが、記事にされた本人にとつては愉快ではいられない内容のものばかり。

櫻井と蘭子のふたりは、これまで寄ると触ると火花を散らしていたが、今は一方的に櫻井が蘭子をやり込めている形になつていた。

静穂も櫻井も、いくらなんでもやりすぎだつた。愛美ですら腹に据えかねてきただくらいで……。らしくなく腹を立てていてる愛美とは対照的に、蘭子は無口になつていつた。そんな中にあつて、百

代だけはいつもとなんら変わりなく、現状を見守つてゐる感じだつた。

そんなある日、蘭子が晴れ晴れとした顔で登校してきた。彼女は一日中ご機嫌で、静穂の皮肉も櫻井も、まったく相手にしない。いつもの攻撃が功を奏しないことに、櫻井は苛立ちを隠しきれない様子で、愛美がひとりのところを捕まえて、蘭子の変貌の理由を聞きたがつた。

櫻井に腹を立てていた愛美は、もちろん彼をそつけなくあしらつた。彼女の態度に櫻井がむつとしたのを見て、愛美はいくらか胸がすつとした。

この日三人は、放課後を待つて、また百代の家に上がりこんだ。

「わたし、ついにやつたの。やつたのよー！」

蘭子は嬉々として叫んだ。

今日一日の蘭子の様子に、予想していたことだつたが、やはり驚いた。

「誰？」

百代の問いに、蘭子は勝ち誇った顔で、まったく知らない名前をあげた。某有名国立大の二年だとう。

「本当に付き合うの？」

呆れた顔で百代が聞いた。

「もちろんよ」

「蘭ちゃん、そのひとのこと好きなの？」

愛美はかなり不安な気持ちで尋ねた。

蘭子は人指し指を振り、ちっちつと舌を鳴らした。

「そんなことは問題じやないのよ。賢さとルックス、それだけ揃つてればいいの」

愛美は思わず天を仰いだ。さすがの百代も顔を曇らせてている。

「やっぱり、高校生のわたしたちには同じ年齢くらいの……」

「何言つてるの！」

愛美は言い終わらぬうちに蘭子に囁みつかれてひるんだ。

「やつの彼氏も大学生なのよ。高校生の彼氏なんかじゃ到底勝てっこないじやないの」

恋愛に対して、勝つだの負けるだと口にしている蘭子が、愛美は不安でならない。

「さあ、これであいつを見返すのも時間の問題」

勝利を手にしたマウンド上のエースのように両腕を高々と上げ、蘭子はあけっぴろげに微笑んだ。

「さあ、次はどうち？」

蘭子はふたりに向き直り、楽しげに叫んだ。

残念というべきか、喜ばしいというべきか、蘭子と彼の仲は一週間とたたぬうちに亀裂が入り、二週間を迎える前に崩壊した。自己中な蘭子であれば、十日持つただけでも奇跡に近いと愛美には思えた。相手が見切りをつけたのか、蘭子の言葉どおり彼女が飽きたのか真相はわからなかつた。そして次の朝、ひと悶着あつた。蘭子の破局を面白おかしい記事にして、櫻井がばら撒いたのだ。

「櫻井つたら、くやしい。くやしい。くやしー！」

「わめ 嘘きたい気持ちは理解できないでもない。なので、愛美は蘭子を思う存分喚かせておくことにした。た。

結局は、口の軽い蘭子の身から出たさびなのだ。のろけてばかりいた彼女が、突然口をつぐめば破局が匂う。

蘭子は正直が取り柄で嘘がつけない。勘の鋭い櫻井にずばりと聞かれて口ごもつたのでは……： 気が済むまで喚いたためか、蘭子はしばし静かになつたが、握り締めた拳をブルブルと震わせ始めた。そして……：

「ルックスのいい男なんていくらでもいるわ。櫻井、見てらっしゃい！」

蘭子は大声で叫びながら、天に向けて拳を突きあげた。

攻撃の対象が……いつの間にか変わっていた。

開くたびにキーツという金属が擦れた音がする玄関のドアを開け、愛美は買い物袋を提げて我が家に入つた。建物は古いが、部屋は三部屋あるし、愛美にも自分専用の部屋がある。冷蔵庫の中に食料品をしまった愛美は、着替えのために私室に入つた。

彼女の部屋はごくさつぱりとしている。人の目には、女の子の部屋とは映らないに違いない。和室だからベッドもないし、あるいは机と椅子。そして、ちょっとしたボックスの棚だけだ。本は好きだが、買わずに読みたい本は図書館で借りている。いまこの部屋にある五冊の本も、図書館の本

だつた。

服は既製品を買うよりも、安い生地や無地のTシャツなどを買つてきて、自分の好きにリフオームして着ている。それらの服は、蘭子や、個性的というかちょっとおかしなデザインの服ばかり着ていて百代にも気に入られ、この半年の間に、ふたりにも幾枚か作つてあげたりもしていた。この間の遊園地にも、色違いでお揃いの、愛美お手製のTシャツをみんなで着て行つた。

ふたりからはそのお返しにと、アクセサリー・化粧品や服などをもらつたりしているが、それは愛美の身にそぐわぬものばかりで、ふたりには悪かつたが押入れのダンボールの中に収めたままになつっていた。

けれど、蘭子と百代には本当に感謝していた。彼女たちが友達になつてくれて、愛美はある学園で浮いた存在ではなくなつたのだ。

いまは違う意味で浮いているのかもしれないが、いまの彼女は……ひとりぼっちではない。

先に話しかけてきたのは百代だつた。そして、百代の無二の親友の蘭子が、自動的についてきた。

ふたりとも平凡な愛美と違い、個性の塊で、一緒にいて飽きることがない。

まあ、たまには蘭子に翻弄^{ほんろう}されて、ドタバタしなければならなくなるときもあるが、それも実のところ楽しかつたりする。普通ならありえない体験もさせてもらえるし……。

蘭子のとんでもない御殿のような屋敷に初めてお邪魔したときは、肝がつぶれるかというくらいの衝撃を受けたし、いまでも、上品な物腰の蘭子の両親と対面すると、愛美は声と足が震える。エプロンを着けて台所に立つた愛美は、テキパキと夕食の支度を始めた。

料理を作る作業は大好きだ。包丁とまな板が立てる音、鍋から立つ湯気、部屋に満ちる美味しいそ
うな香り……。この時間は、まるで自分の手のひらが魔力を持つているようを感じる。

台所での仕事を終えた愛美は、自分の部屋から本を取ってきて、居間に座り込んで読み始めた。
父親が戻ってきたのは、それから一時間ほど経った頃だった。いつもと同じように言葉少ない父
と食事を食べ、愛美は片づけを終えた。

風呂から上がってきた父と交代で風呂に入ろうとした愛美に、珍しく父は声をかけてきた。

「進学のことなんだが……」

どうやら、その問いを、父はずっと胸に温めていたらしい。父のことだから、いつどうやつて娘
に切り出そうかと悩んでいたのかもしれない。けれど、すでに一度、進学のことは話しあつたのだ。
こちらに引っ越してきてくれる、陶芸が好きななら父の学部に入つて本格的に学べばいいと父に言われ
たが、愛美は色々考えた末に、就職が有利になりそうな事務を身につけられる専門学校に進むと決
めた。

陶芸はとても好きだが、娘が自分の教え子になるというのは、父にとつても他の教え子にとつて
も、あまりいいことではないだろうと思えたし、陶芸を学ぶための大学の学費は、愛美がぎよつと
するほど高額なはずなのだ。

「もう一度、考え方直してはどうだ」

「でも……もう決めたし」

父の顔が曇ったのを見て愛美は戸惑つたが、専門学校への願書も出してしまつていてる。

いまさら……

「恵依子が……望んでるような気がするんだ」

「え？」

……母さんが？

「このところ、何か落ち着かないんだ」

そう言うと、父は胸の中のものを吐き出そうとするように息を吐いた。

亡くなつた母が、陶芸を学ぶ事を望んでいるという父の言葉は、ひどく愛美の心を揺さぶつた。確かに生前の母は、愛美が創る焼き物を大切そうに手にしては、大袈裟なほど褒めてくれたものだった。

「とにかく、考えてみてくれ」

「お父さんは……わたしに陶芸を学んでほしいの？」

愛美は父と視線を合わせた。父の瞳に、動搖が浮かんだよう見えた。

「お前は土と相性がいい」

徳治の視線は茶ダンスに向けられた。そこには愛美的手作りの器や皿が並んでいる。

「でもお父さん、やりづらくない？ 娘が入ってきたんじや……」

「それも考えたんだが……。娘ということは、内密にしておけばいい」

徳治はそれだけ言うと、自分の部屋に入つていつた。

話は終わつたのだろうと、愛美は風呂場に向かおうとした。

「愛美」

呼びかけられて振り向いた愛美に、父は大きな茶色の封書を差し出してきた。

「願書だ」

驚きつつ愛美が受け取ると、徳治はもう何も言わずに自分の部屋に引き上げた。

封書を手に、愛美は笑いが込み上げてきた。父とこんなに長い会話をしたのは、久しぶりではないだろうか？

学園に編入してふた月ほどたった頃、ひどく「ごもりながら「友達はできたのか？」と、ぶつきた棒に父が聞いてきたことがあつたのを愛美は思い出した。ふたり友達ができると伝えると、そつけなく「よかつたな」と言つてくれた。あのときは珍しいこともあるものだとしか思わなかつたが……

語らない父だからと、彼女からあまり話すこともなかつた。

父は愛美を気にかけてくれていたのに……きっと、ずっと……

唇を噛んで反省していた愛美は、胸にじわりとした喜びを感じて笑みを浮かべた。

電話のベルの音に愛美は顔を上げ、歩み寄つて受話器を持ち上げた。
「はい。早瀬川です」

「はーい、ごきげんよう」

賑やかな蘭子の声が耳に響いた。よほど良いことがあつたのか、ずいぶんと機嫌がいい。

「どうしたの？ 何かあった？」

「今度の週末、土曜日だけど空けといて頂戴」

完全に命令口調だつた。何があつても譲らないわよと、その声は言つてゐる。嫌な予感がした。

「何をするの？」

「パーティーよ」

「はい？」

馴染みのない言葉に、愛美は眉をひそめて聞き返した。

「パーティーよ。その単語の意味は知つてるでしょ？」

それは……知つてゐる。が……

「我が家が主催するパーティーがあるのよ、それに参加するの」

「誰が？」

「愛美、あなた寝てたんじやなくて。あんたと百代よ、決まつてゐるじゃない」

父親が部屋から静かに出てきて、愛美の会話は自然に止まつた。

徳治は台所のほうへと向かつてゆき、その姿はドアの向こうに消えた。

「聞いてんの？」

受話器から聞こえる蘭子のガミガミ声に、愛美は意識を戻した。

「ご、ごめん。お父さんがすぐ近くにきたもんだから……」

「もおつ、携帯なら家族に気を使うこともないのに。家の電話しかしないなんて、不便でしようがな

いでしょう？ 携帯くらいのもの、どうして持たせてももらわないのよ」

そんなことを言われても……

「別に、不便じやないし」

「不便に決まつてるわよ！」

囁み付くような大声が耳にビーンと響き、愛美はパッと受話器を耳から遠ざけた。

あー、びっくりした。耳の奥がまだジンジンする。

「あんたは持つたことないから、この便利さがわからないのよ」

まあ、そうなのかもしれないが……

「ともかく、ドレスはわたしが用意しとくから」

「ドレス？」

「そう。靴もバッグもあるから、あんたはいつものように、いつもの格好で、百代と一緒にここに
くればいいの。簡単でしょ？」

「簡単……？」

いまいち意味を理解できず、愛美は意味もなく蘭子の口にした言葉を繰り返した。

「そう。簡単なことよ。来るわね？」

「あ……あの」

「何よ、まだ何か聞きたいことでもあるの？」

「何のために、わたしと百ちゃんは、そのパーティーに参加するの？」

呆れたように鼻を鳴らす音が聞こえた。

「決まつてゐるじやない。そこらには転がつていない、ハイレベルな男を手に入れるためよ。頑張つてよ。それじやあね」
ブツンと電話は切れ、愛美は呆然として受話器を見つめ続けた。

3 杖をひとつ

「少しは落ち着きなさい。愛美」

蘭子にいくらかしなめられても、愛美は部屋の中を歩き回ることをやめられなかつた。

一時間後には、藤堂家が主催するパーティーへ出かけることになつてゐるというのに、とても落ち着いてなどいられない。緊張して胃が引きつりそうなのに……

いまこの場には蘭子の姉の橙子とうこもいて、落ち着きのない愛美を見て、やさしい笑みを浮かべている。

髪をセットしてもらつてゐる百代と、愛美は鏡越しに目を合わせた。彼女もまた愛美を見て愉快そうに笑つてゐる。

愛美はみんなの背後から、そつと鏡を覗き見て顔をしかめた。そこには眼鏡をかけて気を張りつ

めた、青白い顔の見るからに冴えない女が映っている。

蘭子にパーティーに適したドレスを借りることになつていてるから、身なりだけはおかしくないようできるだろうが……

来るつもりはなかつたのに……

蘭子の剣幕……そしてほんのちよつぴりの好奇心が頭をもたげ、のこのことやつてきてしまつた自分を愛美は呪いたかった。

上流階級とか庶民とか、そんな言葉になど、これまでなんの思いも抱いていなかつたし、人間なんてみな同じという考えだつたのに……

愛美は自分が一般庶民なのを、つくづくと思い知らされた。

百代の髪のセットと化粧が済み、大変身を遂げた友を称賛の面持ちで見つめたあと、愛美は覚悟を決めて鏡の前に座り込んだ。

彼女の三つ編みの髪がほどかれ、美容師が櫛で梳き始めた。

「素晴らしい髪をお持ちですね」

お世辞なのか、やさしい心配りか、美容師が感嘆したような声を洩らした。

「でしよう。愛美的髪つて、ほんとつやつやできれいなの。手触りも最高よ」

蘭子はまるで自分の自慢のように言う。その褒め言葉はくすぐつたすぎて、愛美は恥ずかしさに頬を赤らめた。褒められるという立場に慣れていないせいで、どうにもいたたまれない。

「アップにしたりしないで、このまま垂らしたらどうかしら？」

美容師が蘭子の指示どおりまとめて上げようとするのを見て、橙子が遠慮がちに口を挟んだ。

「うーん。それもいいでしようけど……。やっぱり、今日のところはぐんと大人っぽく仕上げてほしいの。じゃないと、大人な男たちの目に妹としか映らないかもしれないわ。それじゃあ、今夜の意味がなくなっちゃうもの」

そんな意味など、なくなつたほうが良いのだが……。

蘭子の意見が通り、愛美の髪は幾筋か髪を垂らした見事なアップに仕上げられ、小さな白い花を模した髪飾りが、頭のあちこちにたくさんつけられた。

髪型は文句のつけようもなかつたが、黒縁の眼鏡をかけているのがアンバランスで、滑稽にしか見えない。

蘭子と橙子の華やかさ、そして愛らしい百代と自分を比較し、愛美はズンと氣落ちした。
髪をセットし終ると、すっと眼鏡が外された。

「あら」

美容師が、めんくらつたような小さな叫びをあげた。

愛美は右と左に瞳を動かし、いつたい何が驚きの原因となつたのか探したがわからなかつた。
鏡に映るぼんやりとした愛美の顔に、ぼやけた色がつけられていつた。

思ひやりのあるみんなは、パーティーに乗り気でない愛美の意氣をあげようという気遣いか、で
きあがつた愛美の顔を見て興奮した叫びをあげた。

「愛美の目つて、こうして化粧すると、さらに大きく見えるわね」

蘭子が新発見というように笑い声に混ぜながら言った。

「愛美さんは、体格の割りに、お顔がちつちやくていらつしやるから」

「ああそうね。それで目の大きいのが、なおさら目立つのね」

橙子の言葉に、百代は納得したように言う。

蘭子の用意してくれたドレスに袖を通すときだけは、愛美もドキドキしながら笑みをこぼした。
こんなドレスを着ることなど、この先なかなかありそうもない。

百代のドレスは、これしかありえないだろうというくらいぴったりのピンクのフリフリで、百代
を童話の中のお姫様に仕立てている。

蘭子はと、黒っぽい銀色の身体のラインをくっきりと際立たせるドレスで、同じ銀色の大
輪の薔薇を髪に飾った彼女は、とても十八歳とは思えないセクシーさだった。

百代と愛美のできあがりを見て、蘭子は自分のドレスの選択はやはり間違つていなかつたと、や
たら嬉しそうだつた。

愛美のドレスは濃いクリーム色で、襟元をくるりと囲むように、やわらかな素材で作られた可愛
らしい小花が散らしてあつた。控えめなフリルが効果的につけられ、そのフリルにはほんの少しラ
メが散りばめられ控えめに輝いている。可愛らしく、それでいてとてもエレガントなドレスだつた。
ただし、やたら胸元が開いていた。

着替えを終えた愛美を一瞥した全員の視線が、彼女の胸元に注がれたらしかつた。

眼鏡を取り上げられて返してもらえない愛美には、はつきりと確認できなかつたが……

「愛美のその胸は、マシンガンくらいの威力があるわ」

百代からからかうように言われた愛美は眉をしかめた。

「マ、マシンガン？……ねえ、胸のところが開きすぎじゃない？」

「何言つてるの。わたしのも、姉様のだつて同じくらい開いてるわよ」

叱るように言つた後、蘭子は愛美的胸に顔を寄せるようにして、じーっと見つめてきた。

「それにしても、愛美のおっぱいのふくらみは、手にとつて食べたくなるくらい美味しいそ、うじやないの」

そんなとんでもない発言をし、蘭子は愉快そうにケラケラ笑つた。

「蘭」

横にいた蘭子の姉が、妹を小声でたしなめた。

愛美は自分の胸を見下ろし、不安感でいっぱいになつた。

「ね、ねえ……わたし、やつぱりやめておくわ。ここで本でも読みながら、暇つぶししてるほうがいいの。お願い、三人で行つて……」

小さな白いバッグの金色の細い鎖を、引きちぎりそうなほど堅く握り締めた愛美は、駄目とわかつていても、最後にもう一度懇願せずにいられなかつた。

「いまさら何言うのよ。支度もできんのに、行かないなんて許さないわよ！」

唾を飛ばす勢いで怒鳴りつけるばかりで、蘭子はまるで取り合つてくれない。緊張してよれよれの胃が、蘭子の怒号パンチを食らつてずきんと痛んだ。

「別世界を見るチャンスだよ。愛美行こうよ。あんたが行かなきや、わたしがつまんないよ」

そう愛美をなだめるように言う百代は、もちろん浮いたりしない。

カールした柔らかな後れ毛がふわりと額にかかつた百代は、砂糖菓子みたいに甘くて、とても可愛い。パーティー会場でも、ずいぶんと人目を引くことだろう。

美人の蘭子と橙子の姉妹に至つては、パーティーの華になること間違いないのあでやかさだ。ここに、年老いたやさしい魔女が現れて、杖をひとつり、魔法の力で百代のように、蘭子や橙子のように、輝く姿に変身させてくれたなら……

けれど、魔女も魔法も存在しない……

おどぎ話は……おどぎ話でしかないのだ……

4 別世界への招き

パーティー会場に向かう愛美は、慣れないヒールのせいによろめきそうになつて蘭子の腕をぎゅっと掴んだ。

「大丈夫？ ちょっとヒールが高すぎた？」

「だから言つたのに……」

支度が終わつても蘭子は眼鏡を返してくれなかつた。

「おつとかすんだ世界にいては不安でしようがないのに。

「ね、眼鏡はどこなの。お願ひだから返して」

愛美は必死で焦点を合わせながら蘭子に懇願した。

「そんなもの、置いてきたわよ」

切つて捨てるような言葉に、愛美は啞然として蘭子を見つめた。

「そ、そんな……」

彼女は半泣きになつた。

「持つてゆくつて言つたじやないの。どうしてもつて言うなら、返してくれるつて……」

「いいからいいから、そのままが素敵よ。自信をお持ちなさい。わたしの次くらいには、きれいよ
愛美はどつと疲れを感じた。

「それ聞いて、わたし、喜ぶべきなの？」

「もちろんよ」

当然というような蘭子の言葉に、愛美の疲れは二倍に膨れ上がつた。

「百代はどこ？」

「えっ？」

一瞬沈黙が広がつた。

百代は彼女のすぐ後ろについて来ていたはずだつたのだが……

愛美は周囲に視線を走らせて、すぐに諦めた。いまの視界で、何を探そうとしても無駄だ。

「あつ、いたわ」

「どこに？」

「ずーっと後ろ。……まったくもう。やたらきよろきよろして……」

蘭子はイライラと足を踏み鳴らした。

「まるで、おのぼりさんみたいじゃないの。すぐにやめさせなきゃ」

愛美が止める間もなく、蘭子はあつという間に愛美から離れていった。

川の流れに引っかかったゴミみたいに、ぱつんと捨て置かれ、心細いつたらなかつた。

人波の邪魔になりながらも、しばらくの間はそのまま佇んでいたが、通り過ぎてゆくひとたちの迷惑そうな視線が自分に向けられているようで、愛美はいたたまれなくなつた。

決心した彼女は、ひとにぶつかつて無様に転ぶことのないよう、用心しいい一步一歩、壁のほうへと寄つていった。

壁を目前にした彼女の肩にひとの肩が当たつた。衝撃はたいしたことはなかつたのだが、不安定なヒールのせいで、愛美は思つたより大きくよろめいた。咄嗟に壁の方向に手を伸ばしたが、手のひらに触れたのは固い壁ではなかつた。

他人の身体に触れたことに驚いた彼女は、急いで手を引き、そのせいで大きく前に倒れ込んだ。衝撃とともに、愛美は目の前のひとにぶつかつた。相手はさつと両腕を広げ、彼女の身体を支えてくれた。おかげで床にひっくり返るという災難は免れた。

「ご、ごめんなさい」

お詫びとお礼を言おうとおずおずと見上げてゆく間に、彼女がぶつかったのは「デイナースーツ」を着ている男性だとわかった。

愛美は血の気が失せて青ざめ、相手の首から上に目を向ける勇気がなく、視線をUターンさせて俯いた。

「どうしよう。……別世界のひとだ。

「え……」

相手は短い言葉を発しただけで、それ以上何も言わない。

あまりのばつの悪さに彼女は真っ赤になつた。

「不破。お前も来たのか？」

背後から来たらしい男性が、彼女がぶつかつた相手に親しげに声をかけた。

彼女が壁と間違えた男性は不破という名らしい。

愛美はそーっと後ろを窺つた。同じくディナースーツを着た男性だ。

「来ないわけにいかなくなつてね」

どうやらこの不破というひとも、嫌々やつて来たらしい。

共感のようなものが湧いて、愛美は小首を傾げて微笑んだ。

それにしても、素敵な声だった。愛美はその声だけで不破という名の男性に好感を持った。そし

てそんな自分の思いを笑つた。

相手は愛美に好意など感じていないだろう。迷惑なら感じただろうが……

ハイヒールの高さによろけてぶつかってくる女など、迷惑以外の何ものでもないに違いない。会話は続いていた。いまさら言葉をかけて謝ることもできないと悟り、彼女はその場からそつと離れた。すでに彼の意識から愛美は消えているだろう。

十歩ほど歩いたところで、愛美は一度だけ後方を振り返った。

これだけ離れると、愛美の視力では、二人の男性は影法師程度にしかわからない。蘭子と百代が彼女を見つけて戻って来てくれるまで、この場にいるしかない。

愛美は無意識に、肩にかかる一筋の髪に指をからめた。

いつもなら、緊張したときなど、おさげの三つ編みを握り締めるとほつとするのだが、これっぽっちの髪ではたいして頼りにならなかつた。

「積極的に男性にアプローチしろなんて言わないから、ふたりとも気楽にパーティーを楽しみなさい。今日のシェフはまあまあ腕もいいらしくて評判だから、きっと美味しいわよ」

彼氏獲得のために、とんでもないことを強要されるのではないかと戦々恐々としていた愛美は、その蘭子の言葉にかなり驚いた。

眼鏡を持つてこなかつたことに、罪の意識を感じているのだろうか？

蘭子のほうは主催者の家の娘だからか、愛美や百代と一緒にいられないようだつた。

それに、蘭子だけは、参加した目的を何が何でも果たすつもりだろう。

ここは藤堂家の別邸とのことで、パーティー会場はかなり広かつた。真ん中の一番大きな部屋がイベントのために使用されるようで、壁際にそれなりの人数の楽団がいて、いまは軽快な音楽を奏でていた。その会場の両隣となるふたつ部屋も開放されていて、そこには様々な料理が用意されていた。きらびやかに着飾った参加者たちは、自由にその三つの部屋を動き回って楽しんでいる。どんな場でも緊張知らずな百代は、テーブルの上の豪勢な料理をさつそくパクついた。料理は確かに美味しかった。百代という心強い友のおかげで、始めの緊張も薄れ、愛美は百代と一緒に楽しみながらあちこちのテーブルを回った。

5 悪漢と勇者

「愛美、わたし、おトイレに行つてくるから、これ持つてて」

小さくカッティングされたケーキを頬張つているところに、百代が皿を差し出してきて、受け取つたものの愛美は慌てた。

「わ、わたしも一緒にいく」

ただでさえ視界があやふやなのだ。こんな場所にひとりきりにされたくない。

どうもこの会場に集まつた男性たちは、この場にいる女性全員に、公平に声をかけなければならぬという使命に燃えているようなのだ。

適当に相槌を打ち、手に負えなくなると、ふたりしてそそくさとその場を離れるというやり方で回避してきたが、ひとりではその自信もない。

「駄目だよ。食べかけのお皿、持つてけないもん」

百代からびしやりと言われ、愛美はひるんだ。

「だ、だつて」

「すぐ戻るつてえ」

百代は安心させるように軽く愛美の肩を叩くと、両手に皿を持った彼女を置き去りにして、一番近いドアへと小走りに駆けていつてしまつた。

「ここにちは」

背後からの突然の声はひどく親しげで、愛美はぎよつとして振り返つた。

まるで、愛美がひとりになるのを待つてでもいたかのようなタイミングだつた。

まったく見も知らぬ男性が、声と同じ親しげな笑みを浮かべて、驚くほど至近距離に立つていた。
近距離には困惑したが、そのおかげというか、相手の顔はそれなりに確認できた。

「はじめまして……かな？」

何か素直に返事を返せない裏のありそうな笑みで、愛美の全身は固く強張つた。

そんな愛美的反応を敏感に悟つたのか、相手は親しげな笑みを巧みにひっこめた。その様は、ひ

どくするがしこく見えた。

彼女は強張つた足を無理に動かし、やつとの思いで半歩後ずさつた。

「私は芝下しばしたといいます。君は？　どこのご令嬢？」

質問に戸惑う愛美が両手にしている皿を、芝下と名乗る男性は、一枚ずつ取り上げてテーブルに置いた。

「わたし……れ、令嬢なんかじゃありませんけど……」

動搖いっぽいに、うわざりながら愛美は答えた。

その無様な返事に、芝下という男性は笑つたようだつた。

「ふん。君、名前は？」

答えるのが当たり前というような傲慢な問いかけだつた。もちろん正直に答えるつもりなどない。困っている愛美に、芝下は手にしている液体が入つたグラスを差し出してきて、有無を言わざず握らせた。受け取りたくはなかつたが、受け取らざるを得ない強引さに愛美は怯えた。

この場からいいますぐ逃げ出したいのに、身が竦すくんで動けない。

「喉が渴いてるんじゃないかい？　冷たくて美味しいよ、ともかく一口飲んでごらんよ」

無理強いするように勧められ、逃げ場がなくなつてゆくようで恐ろしくてならなかつた。

「あの、わ、わたし、あの、行くところがあるので……」

声が隠しようもなく震え、相手が笑いを噛み殺したのに気づいて、頬が熱くなつた。

「行くところ？　どこ？　一緒にについて行つてあげるよ」

ねつとりとしたいやらしい響きの声に、彼女は全身、ぞわつと総毛立つた。

動かない足に恐怖が這い登ってきて、愛美は必死に顔を横に振った。

「お、お構いなく」

どう頑張つてもうわざる自分の声に、愛美は泣きたくなつた。

相手はそう簡単に引き下がる様子はなく、男性を振り切れないことに、さらなる恐れが湧きあがる。

百代が戻つてきてくれさえすれば……

「遠慮はいらないよ。どこに行きたいんだい？」

相手がすっと手を伸ばしてきて、愛美の手首を掴んだ。

彼女はぞつとして目を見開き、「いや」と、小さな悲鳴を上げた。

「芝下」

押さえ込んだような低い声がした。

こ、この声……

彼女は助けを求めて声に振り向いた。

「その手を、放せ」

その低い声には、相手を圧するような響きがあつた。

ありがたいことに手首はすぐに自由になり、ほつとした反動で愛美は涙ぐみそうになつた。

「不破の坊ちゃん、ずいぶんと忙しそうだったが、もうやつてきたのか。残念」

坊ちゃんという呼び名に、不破という男性から怒りが燃え上がったような気がした。

芝下という男性は、肩を竦めると、あつさり立ち去つていった。

芝下を見送つてもいるのか、不破は少しの間黙り込んでいた。

お礼を言わなければと思つたが、いまさらながらに心臓がドキドキして胸が苦しく、愛美は静めるのに難儀した。

「大丈夫ですか？」

不破というひとは、とても礼儀正しいようだつた。

芝下と同じに見知らぬひとなのに、先ほどのような恐怖などまつたく感じなかつた。

それにこのひとは、さつき愛美がぶつかつたひと……

あのときに言えなかつたお詫びとお礼が言える。

愛美は緊張を解いて頷くと、心の底からほつとして、笑みを浮かべた。

「ありがとうございました」

「……いえ」

とても短い言葉なのに、彼が口にするとひどく凜々しく聞こえた。

顔はまだはつきりと見ていないが、声だけに酔うということは現実にあるようだつた。

「先ほども……あの、ぶつかつてしまつてすみませんでした」

「気づいてもらえていたのですね」

彼の声には、嬉しげな響きがあつた。

「あ、はい。いまの方が、不破つておつしゃつたので、そつかなと思つて……お詫びも言わないままで、ほんとすみませんでした」

「でも、ぶつかつたというほどではない。私の身体にちよつと触れた程度で……」
愛美は恥ずかしさにかられ、気まずげに唇を噛み締めた。

そして百代の姿を探して、そつと周りを見回した。

百代つてば、まだ戻つてこないのだろうか？

「どなたか……探していらつしやるのですか？」

「ええ、友達が……そろそろ戻つてくるはずなんです」

愛美は顔をしかめて、百代が消えたドアのあたりを窺つた。

「百ちゃんつたら、どうして戻つてこないのかしら……」

ため息をつきながら、愛美は知らず呟いた。

「お友達が戻つていらつしやるまで、ご一緒させていただいてよろしいですか？」

「え？」

「ご迷惑ですか？」

愛美は戸惑い、なかなか言葉を返せなかつた。

相手は辛抱強く、愛美的返事を待つてゐるようだ。

「で、でも、わたしどいても……た、退屈だと思いますし……」

「では、退屈だと感じたら、お互に好きなときに別れるということはどうでしよう？」

言葉に少し笑いがあった。冗談として捉えて良いようだつた。

愛美は瞬きして、その男性をちらつと見上げた。

ルックスは……すごくいいみたい。と瞬間考えた自分に気づいて、愛美は頬を赤らめた。

どうやら、知らぬ間に、かなり蘭子の感化を受けているらしい……
自分らしくない思考にどぎまぎし、彼女は先ほどからずつと手にしていたグラスの液体をくいつと一口で飲み干した。

甘くてとろりとして美味しかつた。けれど、喉を伝つてゆく間に、かなりの熱を帶びてきて彼女は驚いた。

「あ、はあー。こ、これ何?」

不破が愛美的グラスを取り上げた。

「ブランデーのようですね。大丈夫ですか?」

「な、なんか、すつごく、……い、異常に、あ、暑いです」

潜めた笑い声が響き、不破に笑われた愛美は、しゅんと萎れた。

「少し、外の風に当たりに行きますか?」

「外?」

思考回路が、少しばかり曖昧になつてきたような気がした。それに、身体の重心も取りづらい。

「あ、えつと……」

彼の提案を耳に入れてから思考が受け入れるのに、少々手間取つた。

ふらふらする頭と発熱し始めた頬に、外気はきっと気持ちが良いだろう。風も吹いているかもしない。

外に出るという案は、まつたくもつて素晴らしい案だと、愛美は感心した。

「はい。そうします」

愛美は素直に頭を下げて歩き出し、どうも少しばかりよろめいたようだつた。

さつと彼の腕が目の前に差し出され、彼女はありがたくそれに寄りかかつた。

愛美は不破の導く方向へと、彼の腕にもたれたまま歩き出した。

6 夢の中は薔薇色

ぼうつとした思考と、ぼうつと霞んだ視界の中で、何か違和感を感じた。

その違和感が警告のようなものを発しているように思えて、愛美は立ち止まつた。

「どうしました？」

純粋に不思議そうな問いかけ……

危険や怖れるものは、その声にはなかつた。

愛美は顔を上げて彼に向けて微笑んだ。

立ち読みサンプル はここまで

「なんでも」

「そう」

不破が微笑み返してきた。

やさしげで気が遠くなりそうなほど魅力的で、まるで夢の中の王子様のようなキラキラと輝く笑みだった。だが、彼の姿は視線を向けるたびに増えたり減つたりする。

双子のように見えたり、ときによつては三人以上にも見えるのだ。
二重三重に見える彼の顔と、はつきりしない彼の表情がもどかしく、愛美は視界が安定するまで、幾度も目を凝らして彼をじっと見つめた。

彼の瞳をきつちりと捉えてほつとした愛美は、夢心地で微笑んだ。

意識はさらにぼおつと霞み、彼女は夢の王子様に見惚れた。

外はとても気持ちよかつた。屋敷の中庭はきれいに手入れがされ、薄暗さが増した空間は、うまく配置された明かりに照らされて、薔薇の美しさが際立つていた。

ふたりは広い庭をそぞろ歩きしながら少しずつ会話をした。けれど、ブランデーに酔つてゆるんだけ愛美の頭脳はまともに働いてくれず、会話は途切れ途切れのものになつた。

それでも彼は飽きる様子も呆れる様子もなく、愛美に頼れる腕を貸してくれていた。

会話が書物のことには及ぶと、ゆるんだ頭ながらも興味の対象であるからか、話は弾んだようだつた。

ようだつたというのは、会話が彼女の記憶にまつたく残つてゆかないからだ。